

1

指示する語句・接続する語句

◆指導ページ P.3～8◆

【指導のポイント】

指示する語句の指示する部分は、直前の部分であることが多いが、後にある場合もある。また、語句を指示する場合だけでなく、文や段落全体を指示する場合もある。指示する語句に指示すると考える部分を入れて、意味が正しく成り立つか、確認することが重要である。接続する語句は、文と文、段落と段落の関係を明らかにしている。順接や逆接、並立、対比、説明、転換といった働きがある。

演習問題A 1の板書例

●筆者の考え
 生きることに不確実性に向き合うこと
 ↓ 正解のない世界
 ↓ 脳をどのように使うのか
 || 最も大切な問題

●問題提起
 脳の力を発揮させる道具はなにか?

●筆者の主張
 身近な道具 || 感情

■喜怒哀楽 || 予測不可能な現実への緩衝材

■脳科学 || 感情の幅が広い人
 ↓ 大脳辺縁系が発達
 ↓ 不確実性への適応能力が高い
 || 臨機応変の対処 || 脳の回路

■日頃 || 感情を豊かにする
 ↓ 共感・反論 || 喜怒哀楽の感情を豊かに
 ↓ 人間関係の齟齬 || 本能 ↓ 事前にキャッチ

○重要語句
 ○臨機応変 || 状況に応じて、適切な対応をすること。
 ○喜怒哀楽 || 喜びや怒り、哀しみ、楽しみなどの人間の持つ持っている基本的な感情を表す語。

演習問題A 2の板書例

■古代エジプト人がどうやってパピルスで紙をついたのか || 謎
 ↓ いくらやってもうまくいかない
 ↓ その秘密がわかった: 水に浸して重ねる
 ↓ コロンブスの卵 || 人の気づかないところ
 ↓ いったん忘れ去られた技術を復活させるのは難しい

■新王国時代の遺物の中には、どうやってつくったのか明らかになっていないものもある
 ↓ 貴石をビーズにする || 例
 ↓ 穴をどうやって開けたのか
 ↓ 現代の技術をもってすれば不思議はない
 ↓ しかし
 ↓ 新王国時代には、金属ドリルは存在しない
 ↓ 彼らはいかにして、ビーズをつくったのか
 || 謎のまま(難)

■忘れられてしまった技術はいろいろある || 面白い研究
 ↓ なぜ忘れられたか
 ↓ 新しい技術が生まれて、もはや使われなくなってしまうから
 ↓ ← 歴史の観点
 ↓ 失われた技術に照明を当てること || 重要なテーマ

○重要語句
 ○コロンブスの卵 || 人の気づかないところ。
 ○遺物 || 過去の人類が残したもの。

演習問題Bの板書例

■生物でも、工業製品のような規格があったほうがよいものもある
 ↓ 野菜 || 例
 ↓ 店(店頭): 同じかたちで同じ大きさ、味もできるだけ同じに統一
 ↓ 消費者: 安心して買える
 ↓ 生産者: 世話をするのにたいへん都合がよい

■栽培植物 || 個性は抹殺される
 ↓ 栽培の条件もできるだけ画一的にされる
 ↓ できあがったものは、工業製品のように規格化されたものになる

■人為的につくり出され、育種された飼育栽培動植物
 ↓ 人の庇護なしには生存が保証されなくなっている
 ↓ それに対して

■野生種(現生種・現に生存している種)
 || 個性的な変異・環境条件の変動に対応して進化
 ↓ 個体によって条件に対応する力にばらつきがあるため、種としての生存の可能性は大きなものになっている
 ↓ 進化の道筋で獲得した自然児としての知恵を備えている

○重要語句
 ○変異 || 生物、特に同種の生物の各個体の性質が互いに少しずつ異なっていること。
 ○庇護 || 弱い立場のものを守ってかばうこと。

2

段落の要点・段落相互の関係

◆指導ページ P.9～14◆

【指導のポイント】

形式段落の要点は、その段落の中での中心文を見つける。繰り返し使われている重要語などに注目する。形式段落の要点をまとめて、意味のまとまりを把握する。それぞれの形式段落の意味のまとまりが意味段落である。その時に接続語や指示語から、形式段落相互の関係をつかむ。意味段落のつながりから文章の構成を捉える。

演習問題A 1の板書例

■話題の提示

ある夏・オアシス||「ぼく||筆者」

||『芭蕉俳句集』|| ↓「古池や蛙飛びこむ水のをと」

↓トウアレグ人に説明

||トウアレグ人の捉え方|| 事実を説明したもの

↓詩として理解できない

■筆者の感想・意見

世界中 || 芭蕉の句 ↓ 同じ反応だろう

●ほとんどの民族

|| 十の説明 ↓ 一つのものを導き出す

●日本人 || 一つの事柄 ↓ 十の情報を得る

↓ 日本的会話・日本的叙述・日本的論議

|| 一を言って十の理解を相手に求める

世界↑(ほど遠いところ) ↓ 日本的な直感的思考

人間同士の関係 ↓ 十分な説明 || 重要

重要語句

○芭蕉俳句集 || 松尾芭蕉の俳句を集めたもの。松尾

芭蕉は江戸時代前期の俳人である。

○直感的 || 推理や論理によらないで、瞬間的のもの

↓ ことの本質をみきわめる様子。

演習問題A 2の板書例

■問題提起

人間と人間 || 言葉を通じて結びつく

↓ 言葉 || 「結びつく」とはどういうことか?

■説明

だれでも経験 ↓ 深い感動 ↓ 言葉を失う || 沈黙

言葉を失うほど深い感動

自分の本当に伝えたいこと ↓ 人に伝えたい

↓ 表現 || しにくい ↓ 言葉 || 困難

■筆者の主張

言葉との格闘 || 精神の目覚め ↓ 苦しいこと

↓ 忘れる人 || ありきたりの表現

↓ 安易に表現 || 言葉の平均化 || 精神の平均化

●画一性 || 「怠惰な精神 ↓ 安息所」

↓ 画一性 || 「怠惰な精神 ↓ 安息所」

重要語句

○画一性 || いくつものものごとの様子や状態を同じ

に揃えること。

○怠惰 || 怠けていて、だらしない様子。

演習問題Bの板書例

■問題提起

「学び」とは何か?

単純な事態を想定 ↓ 考えて見る

■考えるための例

●赤ん坊 ↓ パパ・ママと初めての家に訪れる

↓ この赤ん坊の経験を考えて見る家

↓ 中をうろちよろ ↓ 自分の家と違う

●生活習慣の違い || 食事 ↓ 座卓で食べる

|| とまどい

●お風呂 || 木の浴槽 ↓ くらい感じ

|| 少しこわい

●猫 || 本物を見たことがない ↓ はげしく動いた

|| 怖い

■筆者の考え

●多くの体験 ↓ 「学ぶ」 ↓ 「知識」の修正・「知識」を

つくりあげる ↓ 「知識」が高次に変容

「学び」

|| 体験 ↓ 新しい「知識」を導き出す ↓ 心身の営み

●「学ぶ」 || 体験・自分で調べて発見

↓ 新しい「知識」

|| 感動 ↓ 動的・情的 || うれしいこと

●日常・たえず ↓ 「学び」の体験

|| 「浅い・深い」

↓ 「深い学び」 || 心身に新しいものが付け加わる

↓ 行動 ↓ 変化

重要語句

○事態 || ものごとの状態や変化する様子などを指す

ことは。

高次 || ものごとの能力や価値を決める基準や程度が

高いこと。

3

要旨

◆指導ページ P.15～20◆

【指導のポイント】

要旨とは、筆者の主張や考え方を端的に、簡潔にまとめたものである。形式段落の要約から意味段落をつかみ、次に意味段落から文章の構成をとらえる。その次に、文章の構成を理解することによって、筆者の主張の書かれた段落や部分を特定する。その段落や部分の要約から、要旨をとらえる。

演習問題A 1の板書例

■問題提起

日本の自然の豊かさ

↓実感している人がどれだけのいるか?

↓明確に答えられない

筆者↓知りたい

↓日本の自然史を書き残すことが必要

■筆者の経験

↓カナダのホテルにあった本

↓「ブリティッシュ・コロンビア州の自然史」

↓「単調なカナダの自然↓自然史の本」

↓日本↓豊かな自然↓自然史の本がない

■筆者の主張

日本の自然↓徹底的に破壊

↓日本列島の自然について書き残す

↓日本の自然史の本↓必要↓義務

↓日本の自然↓破壊をやめるべきだ

重要語句

○自然史↓動物や植物、鉱物などの自然に存在するものを収集・研究し分類する学問。

○単調↓変化がとほしい様子。

演習問題A 2の板書例

■問題提起

●深く傷ついている人・自分は使い捨て人間としか思えない人↑今の日本↓両極分化

●根拠なき全能感にあふれている人

●例

●根拠なき全能感にあふれた人

↓社会と関わりを持たない↓行動を起こさない

↓「自分は素晴らしい」思いこみ

↓仕事↓何もできない↓傷つく

■説明

●仕事をする↓努力↓自己成長

↓「強化のサイクル↓ない」↓根拠なき自己評価でおわる↓社会性ゼロの全能感↓横行

↓全能感崩壊↓崩壊をおそれる↓社会から孤立

●必要なこと↓「かけがえのないさ↓行動」

↓ワンセット↓自己信頼を高める

↓チャレンジ必要

■筆者の主張

●「根拠なき全能感にあふれている若者」

↑社会の冷酷な評価↓同じコインの表裏↓「自己信頼を失ってしまっている若者」

●社会↓評価↓最終目標↓低い評価

↓自分が浸食↓ポロポロ

↓自分の中だけの全能感に浸る

●関わりの中で幸福感の得られる社会↓必要

重要語句

○全能感↓どんなことでもできると思いこむ感覚。

○自己評価↓(この文章で使われている意味)自分に對する肯定感。

○横行↓(この文章で使われている意味)好ましくないことがびこること。

演習問題Bの板書例

■筆者の経験

映画↓筆者の経験↓映画を見て外に出る↓異様な気分

↓愉快でない

映画↓忘れさせる効果↓芝居も同じ↓夢中な状態↓時間を短縮↓忘我・夢中の状態↓時のたつのを気づかない↓ドラマ・演劇

■筆者の主張

●演劇↓見終わった後↓清々しい↓心の整理

↓見る人に高揚感・緊張感↓演劇に転化

●プラトン↓演劇の人間性↓否定

●アリストテレス↓演劇・フィクションを弁護

↓カタルシス説

カタルシス↓悲劇

↓人の鬱積した情緒↓解放↓精神を浄化

人↓望ましくない情緒・記憶↓ため込む↓自分の意志で放出できない↓蓄積↓忘れる

●カタルシス↓忘却の一態

●演劇以外でカタルシス効果のあるもの

祭り↓原初的↓人々↓精神の浄化・活力の増進

↓祭りの反社会性↓社会安定化に有用

スポーツ↓ストレスをとりのぞく

↓ワクチンのようなもの

↓見るだけでもスポーツをしているような錯覚↓元気を出す↓自分の中のわだかまり↓排出↓潑刺

重要語句

○忘我↓特定のことからとらわれて、心が奪われてうっとりすること。

○鬱積↓不平や不満が心の中にたまること。

○浄化↓きれいにすること。

4

場面—人物・背景・出来事

◆指導ページ P.21～26◆

【指導のポイント】

文学的文章の小説は場面を展開することで、作者の思想や主題を読み手に伝える手法を取る場合が多い。場面は情景として描かれる。情景は目に見えるありさまやそのことで心にイメージされるありさまのことである。文学的文章の手法をとる随筆にも情景を描かれるものがある。登場人物の心情は、直接表現や人物の表情や動作、言動などのほか、場面に描かれた情景からも捉えることができる。

演習問題A 1の板書例

半年前 ↓母は体調を崩す
↓母 ↓死出の旅路の覚悟 ↓検査入院

←

入院して二、三日 ↓夜 ↓母から電話 ↓一日の報告
|| お祭り騒ぎ || テレビのリポーター 顔負けの報告
|| いきいき ||

三日目あたり ↓母の電話 || 威勢が悪くなる

四日目 ↓母の電話 || 電話がなくなった

←

一週間目 ↓母を見舞う ↓姉弟 || 四人揃う

●母の様子 || ひとまわり小さくなる

●母の心遣い || そろそろ帰ろうと思う
|| 筆者の気持ちを察する母
↓母から筆者たちを帰らせるきつかけをつくる
↓お見舞いの花・果物の分配 ↓お見舞いの包みより
大きい「戦利品」を筆者に持たせる
|| 筆者に心配させまい ↓元気な様子を見せる

重要語句

○死出 || 死んで、あの世に行くこと。
○戦利品 || 戦争をして、勝利することで相手から奪
い取ったもの。

演習問題A 2の板書例

■泰司・三上くん || 雪合戦

■泰司の気持ち || 三上くん || 動揺するだろう
●泰司 || 三上くんに伝える || 三月で転校する
▲三上くん || うなずくだけ

■泰司の気持ち || がっかり
|| 三上くん ↓ 動揺しない様子

▲三上くん || 転校の理由を尋ねる

●泰司 || 父親の転校だから ↓ 理由を伝える
▲三上くん || 「いそろう」は？
↓ 転校なんかしない
↓ 自分の家で「いそろう」は？
|| 転校してほしくない
|| さびしい
↓ 照れくさい

■泰司の気持ち || 最初 || 三上くんの言っていること
|| わからない
↓ その後 || 三上くんの気持ちが伝わった

■泰司の気持ち || 泣きそうになる ↓ うれしい

重要語句

○拍子抜け || 期待が外れて、気持ちの張り合いがな
くなること
○いそろう || 他人の家に住んで、養ってもらうこ
とや、養ってもらう人のこと。

演習問題Bの板書例

■おれ(ヤマト)・ユウキ || 部活が終わったあとの帰り道
今年の春の大会 || 準優勝
未来のビジョンは出来上がっている
↓ おれ || キャプテン・ユウキ || 副キャプテン ↓ 優勝

●夏休み明けから、おれが通うことになる中学校
= 春の大会で優勝した学校 ↑ よく知っている

●サヨナラ負け ↓ 相手チームの歓声が聞こえた

←

■おれ・ユウキ || くやしい

●絶対、現実になる夢だった || 優勝
← しかし
これ見よがしに円陣組んでいた奴らの学校に転校す
ることになった ↑ ありえない || 納得いかない

●転校の話をユウキにした
|| 情けない思い
← 家の事情
ユウキ || 笑った : 納得

●ひとしきり笑い終わった
← 黙って歩く

■おれの気持ち || 無性に泣きたくなった ↓ 悲しい
= ユウキ || 残念・笑う ↓ いい奴
「また、明日な」って毎日言い合えると思ってた

●母 || 高校で一緒に
■おれの気持ち || ふざけんよ ↓ 怒り
↓ わかり合えない

重要語句

○ビジョン || 未来像。将来展望。見通し。

5

表現の特色

◆指導ページ P.27～32◆

【指導のポイント】

小説や随筆などの文学的文章では、人物や背景、出来事は描写で表現される。描写とは、ものごとや状況をくわしく細かいところまで記述して描くことである。事実部分は描写で描き、感想部分は説明や論述で表現される。描写の内容や表現から、そのときの登場人物の気持ちを表す場合があるので留意する。

演習問題A 1の板書例

● 家の中⇨靴をはく⇨玄関に靴を置かない
⇨靴専用のワードローブ

● イタリア人⇨外を歩いてきた靴
⇨家の中で過ごす生活⇨曖昧

← 「ハレとケ」の区別

● 日本人⇨日本の生活⇨靴を家の中で脱ぐ
⇨はつきり分断

● 靴をはいた生活

⇨外出着⇨夕食の支度
⇨街のマダムのファッション⇨理解

● 日常着の確立

⇨「お出かけ着」でもない

■ 「部屋着」でもない

⇨家の中⇨イヤリング・ブレスレット・指輪

● 家の中⇨きちんとした装い

⇨ミラノのマダム⇨毅然とした美しさ

重要語句

○ 毅然⇨自らの主張や信念にしたがって、ものごとにしつかりした態度で臨む様子。

演習問題A 2の板書例

母⇨風邪気味⇨体調をくずす
⇨木や草の四季の変化を待つ

春⇨寒い日⇨「ひよいと」暖かい日

● 私⇨母の夕食の用意

⇨届く⇨手紙+大ぶりの花の包み

届いた花⇨しでこぼし

■ 眩いばかりの白い花

■ 花弁がうす紅色の花

■ やわらかな芳香

⇨花の生命感

▲ 母⇨「暗くなった山道で咲いていたこの花

⇨足が止まるほど美しい」話を聞く

⇨見たい

⇨私に頼みごと

⇨その花を持って庭に出てほしい

● 私⇨重い花を持って庭に立つ

⇨母の気持ちを推量

⇨庭の花を見て、暗がりに咲く花

⇨山に咲く花の様子を思っている

⇨月あかり・花あかり

⇨母の見た美しさ

重要語句

○ 芳香⇨良い香りのこと。

演習問題Bの板書例

主人公⇨操の気持ち

■ 学校に登校

安堵

⇨校舎

⇨手入れ

⇨行き届いている+運動用具がならんでいない

⇨小柄・非力⇨生徒を運動に駆り立てる

⇨一致団結精神⇨みじめにさせる⇨いやな気分

⇨この学校にはない

■ 教室への第一歩

緊張+気詰まり⇨面白みのないあいさつ

取るに足らない生徒⇨評価された

⇨生徒たちのざわつき⇨平静

孤独感⇨ほうっておかれたほうがまだよい

⇨下手な球技にさせられたくない

■ 休憩時間⇨「樺島至剛」に声をかけられる

驚き⇨「樺島」⇨好奇心や物見高さのない声

自分がかがゆい

⇨気持ちのよい+利発で端正な少年

⇨自分の気持ちをことばにあらわせない

学級の心意気わかる⇨気持ちのよい

⇨「樺島」に集約されている

⇨「樺島」に集約されている

⇨情けない思いをしない

⇨学校生活をおくることができた

⇨転校の中ではじめて

⇨「樺島」の配慮

重要語句

○ 物見高さ⇨好奇心が強いこと。

○ 利発⇨賢いこと。

6

主題

◆指導ページ P.33～38◆

【指導のポイント】

作品の中で、作者が読み手に伝えたい思いのことである。作品全体の中で描かれている中心的な登場人物の性格や考え方をつかむ。さらに作品の場面展開の中で、とりわけ「やま場」となる事件などの部分に注目する。そして、その「やま場」の前後での中心的な登場人物の気持ちの変化に注目する。「やま場」の展開に、作者の主題が表現されている場合が多い。

演習問題A 1の板書例

■話題

自然の川 ↓ 子供の頃に遊んだ川を思い出す

↓ 自分の川 ↓ 聖地

■回想

子供の頃の釣り

●釣針 ↓ 駄菓子屋で買ったもの

●糸 ↓ 母親の針箱の木綿糸

●おもり ↓ 乾電池を包んでいた鉛など

●竿 ↓ 川岸 ↓ 笹竹

●川の中 ↓ 川虫・チヨロ虫 ↓ 川 ↓ きれいな

遊び ↓ 川を観察 ↓ 自然のこと ↓ 知る

■筆者の考え

遊ぶ ↓ たくさん学ぶ ↓ 大切

重要語句

○聖地 ↓ (この文章で使われている意味) 重要な意味をもつ土地。

○駄菓子屋 ↓ 低年齢の子供を対象として、安価な菓子を販売している小売の菓子店のこと。

演習問題A 2の板書例

●初夏の溪流 ↓ さわやか

|| 清水の澄みきった流れ

+ 森をわたる微風によるさざなみ ↓ すわっているだけ || 気が澄む

●銀白の若鮎 ↓ きらめき ↓ 生氣

|| 溪流に新たな世界

●鮎 ↓ 日本の魚 ↓ 万葉集にも歌われる

●筆者 ↓ 子どものころ ↓ 手製の毛針で釣る ↓ 回想

|| 万葉の歌 ↓ 若い娘 ↓ 鮎をつる ↓ 美しい

|| 「透き通る水 ↓ 溪流」

↓ 「銀白色 + 名刀のきらめき ↓ 鮎」 || 日本の色

重要語句

○溪流 ↓ 谷川の流れ。

○生氣 ↓ (この文章で使われている意味) いきいきと活気のある様子。

演習問題Bの板書例

●昂大 ↓ 「おまえなんかには、絶対負けない」 ↓ 強気なセリフだが、声は弱い

■悠馬 ↓ 昂大がついてこれられないように、一気に前に追いついた

← 集団がペースを上げた

■悠馬 ↓ あわてる

← さらにあわてさせる事態

★すでにゴールをしているはずの和弥の後頭部が見えた

▲和弥 ↓ 「さっき、こけて」シューズのつま先が赤くじんんでいた

■悠馬 ↓ もう一度ペースを上げれば、一時間以内にゴールできそうだった

← 悠馬の足は動かなかった…和弥が心配

← すぐうしろには次の集団がせまってきている

●昂大 ↓ 悠馬を追いぬいていった

▲和弥 ↓ 「これはだいじょうぶなアクセントだ。完走できる」…こともなげ ↓ すごい

↓ 和弥が強くなったわけがわかった気がした

・練習熱心

■悠馬 ↓ くやしさはなかった(昂大との勝負に負けたこと) ↓ 和弥のすごさを見たいと思った

ぎりぎりの苦しさの先にあるもの

|| 時間よりたしかなもの

▲和弥 ↓ 苦笑いを返し、速度を少し上げた

■悠馬 ↓ あわてて後を追う

重要語句

○スパート ↓ 全速力を出すこと。

7

1・2章のまとめの問題

◆指導ページ P.39～42◆

1の板書例

■筆者の主張

家具や家電製品

↓へもの⇨文化⇨メディア

⇨わたしたちの思考・感覚⇨深く関わる

例

電灯とエアコンディショナー⇨日常生活の空間の意識⇨変化させた

電灯⇨昼夜⇨一定の光⇨時間の感覚に影響

エアコンディショナー⇨一日温度変化感じない⇨季節の意識⇨曖昧

⇨航空機の中と同じ⇨管理された空間⇨感覚・意識に影響

⇨生活環境⇨自在にコントロールできるもの⇨積極的に受け入れ

■説明

電灯とエアコンディショナー⇨電気エネルギー⇨消費地から離れた場所

⇨集中的に生産⇨集産主義的・法人組織の資本主義

⇨家事の道具+情報⇨生活・産業⇨電気にたよる

⇨巨大なインフラストラクチャー⇨管理

■筆者の主張のまとめ

膨大な家電製品に依存⇨日用品⇨多様な意味

例⇨冷蔵庫・掃除機⇨衛生観念や清潔に対する感覚⇨変容

道具⇨単独の目的⇨観念を変容させる装置⇨変容

日常的な(へもの)⇨感覚・思考⇨文化⇨関わり

重要語句

○メディア⇨伝達手段。

○依拠⇨よりどころとするもの。

2の板書例

「恭子⇨わたし」⇨アルバムをみたくなる

■母親の部屋⇨「父さん」の手帳

「父さん」の手帳

●六月十九日⇨中断⇨白いページ

●書き込み

⇨十月二十五日⇨恭子の誕生日

⇨四月九日⇨陽子の誕生日⇨仕事の予定⇨後から書き込み⇨帰れない父

⇨昨年の十大イベント⇨家族のこと

▲「恭子」⇨母・陽子・恭子⇨父親に守られていたことを知る

■母が部屋に入って来る

▲「恭子」⇨父に悪い事をしてきた⇨父への反発

⇨自分を責める気持ち

⇨泣く⇨母に伝える

◎「母」⇨「恭子⇨わたし」をなぐさめる

⇨父への反発を修復する時間がなかった⇨しかたがない

⇨父親の気持ち

⇨「恭子」⇨のびのびと反抗させてやりたい⇨見守る

⇨父親への供養⇨三人で元気に暮らすこと

▲「恭子」⇨父親と母親の強い愛情が伝わる

重要語句

○見守る⇨(この文章で使われている意味)気にかけて大切にすること。

演習問題A 1の板書例

3	2	1
<p>(1) 特定の季節の季節感を端的に表す語が季語となっている。</p> <p>(2) Dの「桐一葉」は初秋の季語である。</p> <p>(3) 切れ字は助詞「や・よ・ぞ・かな・か」助動詞「けり・なり・たり」がある。</p> <p>(4) 目で見たものと、耳でとらえたものを歌に描いているのは、Cである。ここでは「ゆさゆさ」は音と捉える。</p> <p>(5) 定型とは音数が「五・七・五」となっているものである。Eの句は合計の音数は定型の十七であるが、それぞれの句の音数が全ての句で定型とは異なる。</p>	<p>(1) Cの句の切れ字「けり」に注目する。</p> <p>(2) 句切れなしの句は、意味の流れが切れるときがないものを選ぶ。</p> <p>(3) 句切れは、通常の文で句点の入る箇所になる。</p> <p>(4) 枕詞とは、特定の語句の上に付けて、歌の調子を整えるために使われる。本来は意味をもっていた。通常は五音である。</p> <p>(5) 文の成分が通常の文と異なる順序になっているものに注目する。</p> <p>(6) 反復とは、同じ語句の繰り返しによって、感動を表現する技法である。</p> <p>(7) 「けり」は過去のことからの回想や伝聞に使われる以外に、感動を表現する場合にも使われる。</p>	<p>(1) 体言止めの技法が使われている行は、3行目、11行目であるが、「色彩」に注目した内容は3行目である。</p> <p>(2) 直後で①の理由を描いている。15行目に注目する。</p> <p>(3) 木の実が芽を出した場所を指すことから、6行目と28行目に注目する。</p> <p>(4) 文の成分が通常の文と異なる順序になっていることに注目する。</p>

演習問題Bの板書例

3	2	1
<p>(1) Fは季語がない。この句の「二つ」とは「二歳」という意味である。年齢の数え方で、誕生した最初の年で「一歳」とし、以降は暦年の最初の日1月1日で歳を数える仕方が、数え年である。日本では明治時代までは数え年によって年齢を表していた。</p> <p>(2) 「月」は秋の季語とされている。</p> <p>(3) 切れ字は助詞「や・よ・ぞ・かな・か」助動詞「けり・なり・たり」がある。</p> <p>(4) (3)の示す切れ字がない句はCである。設問から芭蕉の句のCかDに絞り込めば解答は得やすい。</p>	<p>(1) Bの「夕ぐれ」は夕日が落ちて暗くなることなので体言である。</p> <p>(2) 通常の文で意味を捉えた時、「句点」の入らないものは句切れなしとなる。</p> <p>(3) 二句は、「くしたようだ」で意味の上から句切れと判断できる。四句は助動詞「たり」の切れ字があるのが判断できる。</p> <p>(5) 枕詞は「山」に係る「あしひきの」である。枕詞は五音なので「あしひき」ではなく「あしひきの」である。</p>	<p>主題Ⅱ桜 この詩の特色 冬枯れの桜↓「彼女」にたとえている↑ことなる↓「古来Ⅱ桜」の美しさⅡ満開・花が風に散る 無数にからみあった枝Ⅱ美↓飾り気のなさ・気高い</p>

演習問題Aの板書例

4	3	2	1
<p>エ デリケートとはこの場合繊細な様子という意味でとらえる。</p>	<p>(2) 作者の驚きを詠んだ句だから、アが適当である。</p> <p>(1) ほほえましく詠んだ句から、イが適当である。</p>	<p>(4) 少年の頃という鑑賞文の記述からFの句であることが推量できる。</p> <p>(3) 本来なら繰り返し絶えることなく続く季節が期限の区切られたものとして捉えている句はEである。</p> <p>(2) きらびやかな色は何かから推量できる。</p> <p>(1) 生命力とは生長につながることから推量できる。</p>	<p>(5) 24行目以降に注目して内容を把握する。 「虹」を指すことが分かる。</p> <p>(4) 21行目で、村人には虹が見えていないことがわかるので、見えない自分とは村人であることが分かる。また、他人とは、虹の見えている人たちなので、18・19行目からバスの乗客と分かる。さらに、幸福とは感動の対象となっているものなので、「虹」を指すことが分かる。</p> <p>(3) 虹に対する乗客の反応から推量できる。</p> <p>(2) 作者の推測が書かれて箇所を最初に見つける。</p> <p>(1) 倒置文に注意する。作者は「何を」見たのかを読み取る。</p>

演習問題Bの板書例

3	2	1
<ul style="list-style-type: none"> • 反復法：同じ言葉を繰り返し返し、意味を強めたりリズムを整えたりする • 擬人法：人でないものを人にとえる • 倒置法：語順を逆にして印象を強める • 体言止め：行の終わりを体言で止め、余韻を残す 	<p>(4) いずれの句にも共通しているのは、外界への興味とあこがれである。</p> <p>(3) 他の人への感謝の気持ちとは、他の特定の人不幸なことが起こらないでほしいという願いでもある。「ガラス戸張りし人よさちあれ」に注目。</p> <p>(2) 作者が実際に行った行為を詠んだものを選択する。A・B↓見える、C・D↓思う、E↓人に頼んで露をぬぐってもらっている。</p> <p>(1) 空想とは現実には起こっていないことを想起すること、つまり思うことである。そのスケールが大ききものという点から判断できる。Dの「白銀の野を行きたいと思う」が適当。</p>	<p>(8) 子どものようになる、とはどのような状態を指しているのか、推量する。</p> <p>(7) 直喩で表現する。</p> <p>(6) 妻の手がやわらかくなるようなことをよるこばしいと言っているので、手にかけてられた負担が最も小さな負担としてあげられている。</p> <p>(5) 妻の手の色のことであることから推量できる。</p> <p>(4) かわったことで、よかつたと、妻を思う気持ちを表現している。</p> <p>(3) 指示語なので、原則どおり直前の部分に注目する。</p> <p>(2) 17行目で作者の気持ちが直接的に表現している。</p> <p>(1) 3行目や6行目に注目して、季節を推量する。</p>

【指導のポイント】

古典の文章においては、現代文との違いは仮名遣いである。次に、留意するのは語の意味の違いである。古語には現代語の意味と大きく異なるものがある。とりわけそうした語については、古語の意味を正確に理解する必要がある。また、会話の部分についてカギカッコがないので、助詞「と」に注意して、正確に捉えることが大切である。

演習問題Aの板書例

1 田の所有権の争い↓負けた人↓人に命じる⇨争った田を刈り取れ
命じられた人⇨争った田へ行く途中の争いとは関与らない田も刈り取る
↓争った田を刈り取る⇨道理に合わないことは同じ
⇨その途中の田を刈り取ることも
↓命じられた人の言い分⇨興味深い

2 「能」の技
上手い人⇨下手な人の良い所↓まねる⇨最良の手段
↓下手な人のまねはできない⇨強情な気持ち⇨極めない心⇨よくない
下手な人⇨上手な人の欠点をみつける↓自分にはさらに多くの欠点ある
⇨学ぶ・工夫↓良い練習⇨腕が上がる

3 漢武帝と申した帝の時代
・胡塞へ蘇武を遣わしたが帰ることができなかった
・衛律を胡塞へ遣わした
「蘇武はいるのか」(衛律)

4 胡塞の人は隠して「その人は死んで長いことたった」
(衛律が)計略を用いて、蘇武から手紙が来たので生きていると(胡塞の人に)言った
「本当はいます」と言っ、(蘇武と衛律を)会わせた

場所 菅三位の屋敷
時 三位の亡くなった後↓数年後
月を見て詩歌管弦の宴
●ある人⇨歌を詠む↓人々⇨その歌を唱和
■みすぼらしい尼⇨洗い張りの下女
⇨歌の誤り⇨指摘
↓亡き三位の歌についての話↓理にかなった指摘
▲宴に集まった人々⇨恥ずかしい↓宴を止めて立ち去った

重要語句

1 ○理⇨(この文章で使われている意味)人としての行いが正しいこと。
4 ○洗い張り⇨着物を解いて、反物にしてから洗い、のりをつけて乾かすこと。

演習問題Bの板書例

1 嵯峨天皇の時代
宮中に札↓「無悪善」
●天皇↓小野篁に読むように命じる
■小野篁⇨「さがなくてよからん」↓帝を呪っている内容
●天皇⇨「おまえ⇨小野篁」が書いたのだから
↓書いてあるものなら何でも読めるのか
■小野篁⇨何でも読みます
●天皇⇨「子」を十二書かせて、読ませる
■小野篁⇨機知↓上手く読む
●天皇⇨おとがめなかった↓小野の機知に免じて許す

2 横川の恵心僧都の妹・安養の住まい↓強盗⇨みな奪っていく
安養⇨紙ぶすま(紙とわらで作った着物)を着ている
妹・小尼公⇨小袖を見つける
⇨強盗が落としたもの↓安養に着るように勧める
安養⇨盗み取った安養の小袖↓落し物
⇨盗人は自分たちの物と思っっている
↓盗人の承諾ない↓着ることはできない
⇨盗人に返してくるように↓小尼公に命じる
小尼公⇨盗人に小袖を返す
盗人たち⇨しばらく考える↓悪い所に盗人に入った
↓盗んだものを全て返す↓帰っていった

【指導のポイント】

古典文においては主語が省略されている場合が多くある。前後の文の関係や、敬語に注意して、作者や登場人物との関係から判断することなどによって主語を明らかにする必要がある。この点からも、とりわけ敬語については、基本的な語はその意味とともに、尊敬語か謙讓語、丁寧語の区別ができるようにしておくことが大切である。漢文では、返り点の理解が重要になる。

演習問題Aの板書例

1
四月一日
日光山・御社↓参詣
この山の由来⇨二荒山↓空海大師↓開基⇨日光と改名
↓千年先のこの地を予見↓威光⇨天下・国の隅々まで↓四民⇨安心↓世の中
⇨穏やか
この山について書くこと⇨恐れ多い↓筆を置く
(俳句) 訳 省略

2
一一八〇年
遷都⇨急なこと
●平安京↓嵯峨の天皇のころにはじまる↓四百年
●特別な理由もないのに遷都⇨世の中の人々⇨不安・不満
↓不満を言ってもどうしようもない
↓帝・大臣・貴族⇨引越す
↓朝廷に仕える人⇨旧都には残っていない

3
●清涼殿の北側の隅
↓ふすま障子⇨荒海やおそろしい怪物などの絵
↓上の御局⇨目にしていやがったり、笑ったりしている
●御殿の外周の欄干
↓大きい青磁の瓶⇨たくさんの五尺ほどの桜の枝
⇨花が咲きこぼれている
●昼⇨大納言⇨桜色の直衣など色鮮やかなものを着て参内
●帝⇨こちらにおいでになる
●大納言⇨戸口の前に座る↓帝にお話などなされる

4
(1) 七字で四行の詩なので、七言絶句である。
(2) 原則は上から読み下す。返り点のあるところでもどる。
(3) 沙場からもどって臥すを読む。このとき、二字もどるのでレ点ではなく「一、二点」を使う。
(4) 四行目の内容から判断できる。

演習問題Bの板書例

1
粟津に逗留
↓十二月二日↓午後四時ごろ出発
↓京に入る
●逢坂の関↓山腹⇨仏像⇨一丈六尺・板囲い↓人里遠い場所
↓駿河の清見の関・逢坂の関⇨しみじみと心に残る場所
暗くなる↓三条の宮の西隣⇨わが家↓到着
●わが家⇨広い↓大きい・おそろしげ↓都の中とも思えない
●物語を調達してほしい⇨母にせがむ
●三条の宮に仕える親族・衛門の命婦⇨宮様のお下がりの物語⇨特別に珍しい冊子
↓硯のふたに入れて送ってきた
●昼も夜も夢中で読む⇨読書の醍醐味⇨もつとほかの物語も読みたい↓物語を探して見せてくれる人↓いない⇨残念だ

2
・武力を用いて仁政を行うように見せかける者⇨覇者
←だから
・仁徳でもって仁政を行う者⇨王者
←だから
大国を有する

3
(1) 「一、二点」の読み方に注意する。
(2) 現代語訳から、意味を判断する。一般的に使われている意味ではないことに注意する。
(3) 現代語訳の「それ」の指す部分に注目する。指示語に関する問題なので、原則どおり直前の部分に着目する。
・武力を用いて人を服従させる者↓心服されるわけではない・力が足りない
・仁徳を用いて人を服従させる者↓心の底から服従される
・(武王という王の仁徳を)慕って心服しない者はない
大国を有する

板書例

1

- (1) 詩の題名から推量できる。
- (2) 行動は11行目に、場所は12行目に注目する。
- (3) 命じるものは、血である。血が人のように命じるといふ表現は、擬人法である。
- (4) 6・7・9・10行目から、遺伝的に引き継がれてきたことだとわかる。
- (5) この詩で語りかけているのは鮎で、その行動は11行目に書かれている。よって、Bが適当である。
- (6) 「鮎」の季語は夏である。「若鮎」は春で、「落ち鮎」は秋である。
- (7) 二句目の途中で切れている。中間切れである。文として考えたとき、意味の上で切れるのは「くはよし」の後である。

2

- (1) 歴史的仮名づかいで書かれているので、「やうに」「やうだ」は「ように」「ようだ」となる。直喩の表現技法である。
- (2) 鳥が怒っていることは書かれていないし、描写からも読み取れない。鳥が安らいだことは書かれていないし、読み取れない。作者が悲しんでいるとは書かれていない。
- (3) 夜とは一日の終わりであり、暗いということから判断できる。
- (4) 10行目の曙光とは夜明けに輝き出す、東に上る太陽の光のことである。よって、鳥の飛んで行った先は、闇の夜の次にくる夜明けであると想像できる。Iが適当である。

3

- 花山院右大臣
- 夢↓摩利支天⇨宝物を与えよう↓崇拜し供物をしろ
⇨三晩連続で夢にでる
 - 周囲の人⇨ありがたいことだ↓お祭なさい
 - 花山院右大臣⇨朝廷に仕える立場↓正しい行い⇨願い
↓貧しいことは気にしない

演習問題の板書例

4

- 仏道に達した人⇨行い⇨深い思慮
- 恵心僧都⇨鹿↓庭先の草を食べる↓追い払わせた
⇨それを見ていた人
 - お師匠様⇨「草を惜しむ↓けもの⇨苦しめる」⇨無慈悲
 - 恵心僧都⇨わたしが鹿をおわない
↓鹿⇨人に馴れる↓悪い人⇨殺される↓だから鹿を打った
⇨鹿を打つ↓無慈悲⇨恵心僧都⇨心の中に道理

5

- (2) 作者自身の行動を描いているのは三句目である。
- (3) 花が雪のようだ、という表現は一面に花が咲いていることを表している。
- (4) 行く人も絶えた村の道に出て、独り畑を眺める様子から感じとれることは、寂しさが適当である。

演習問題Aの板書例

4	3	2	1
<p>(3) —線の「の」は格助詞で、その付く文節を体言に準じるものになっている。</p> <p>(1) 「歩かれる」の「歩く」は動詞・カ行五段活用である。よって、「れる」がつながる。「た」は助動詞「た」で過去の意味をあらわす。「歩ける」は可能動詞なので注意する。</p> <p>(2) 「お—動詞」は謙譲語である。他には、「申す」「いたす」「さしあげる」「まいる」「いただく」などが動詞として使う場合がある。また、「あげる」「さしあげる」「いただく」などが補助的な役割をする動詞として謙譲の意味を表すために使われる。</p> <p>(3) 行為の主体は「姉」である。「姉」を「お客様」と比べてへりくだるようにする。謙譲語を使う。</p>	<p>(1) 「お—動詞」は謙譲語である。他には、「申す」「いたす」「さしあげる」「まいる」「いただく」などが動詞として使う場合がある。また、「あげる」「さしあげる」「いただく」などが補助的な役割をする動詞として謙譲の意味を表すために使われる。</p> <p>(2) 行為の主体は「姉」である。「姉」を「お客様」と比べてへりくだるようにする。謙譲語を使う。</p> <p>(3) 「お—動詞」は謙譲語である。他には、「申す」「いたす」「さしあげる」「まいる」「いただく」などが動詞として使う場合がある。また、「あげる」「さしあげる」「いただく」などが補助的な役割をする動詞として謙譲の意味を表すために使われる。</p>	<p>(1) 「この」は名詞ではなく連体詞である。③場所を示す格助詞「に」である。</p> <p>(2) 「温かだ」の終止形から形容詞ではなく形容動詞である。⑧擬音語の副詞である。</p> <p>(3) 「降る」はラ行五段活用の動詞なので、促音便「つ」となった。</p> <p>(4) 「生む」は動詞で、未然形に活用させたとき「生ま・ない」の「ま」なので「ア段の音」につながるから五段活用である。</p> <p>(5) 「生える」は動詞で、未然形に活用させたとき「生え・ない」の「え」なので「エ段の音」につながるから下一段活用である。</p> <p>(6) 「の」は体言に準じるものをつくる格助詞である。「は」は副助詞である。どちらも付属語である。</p> <p>(7) 感動詞で、感動・応答・呼びかけを表す。</p>	<p>(1) 「その」は連体詞なので連体修飾語となっている。</p> <p>(2) 「と」はその文節を接続語にする接続助詞である。「ので」もその文節を接続語にする接続助詞である。アは接続助詞「し」によって並立の関係になっている。</p> <p>(3) 「ながめる」に対応する主語は、名詞「私」に副助詞「は」の付いた「私は」である。</p>

演習問題Bの板書例

3	2	1
<p>(1) 「くださる」は尊敬の意味を表す動詞である。尊敬の意味を表す動詞は他に「いらっしゃる」「おっしゃる」「召しあがる」「なさる」などがある。</p> <p>(2) 「ごぞいます」は丁寧の意味を表す動詞である。「ます」「です」といった動詞も丁寧の意味を表す。</p> <p>(3) 「いただく」は動詞「いただく」の連用形である。「いただく」は謙譲の意味を表す動詞である。謙譲の意味を表す動詞には他に、「いたす」「うかがう」「まいる」などがある。また、「お—動詞」の形も謙譲の意味を表す。例えば「お待ちする」などである。</p> <p>(4) 「なかつ」は「自信は+ぬ」とは言い換えて正しい意味になることができれば助動詞である。できなければ形容詞である。よって、形容詞である。また、動詞に接続していれば助動詞なので、その点からも形容詞と判断できる。</p> <p>(5) 修飾する語句の直前にその語を置いて、意味が正しくとおるか確認する。「ふと+行く」か「ふと+和みます」かのどちらかである。「ふと+行く」が正しい。</p>	<p>(1) 「さえ」は副助詞で、最低条件を表す働き、一つの例をあげて、他のものを類推させる働き、その上に加えて添加する働きの三つの働きがある。</p> <p>(2) 「そうだ」は助動詞で、様子・状態と伝聞を表現する働きがある。動詞の連用形につながる場合が様子・状態を表す「そうだ」である。Aでは「降る」がラ行五段活用の動詞である。活用は「降り」なので連用形である。よって、様子・状態を表す「そうだ」である。Bは「行く」はカ行五段活用の動詞である。活用は「行く」なので終止形である。よって、伝聞の意味を表す。</p>	<p>(1) ①「築いて」は「築く」+「て」である。「築く」はカ行五段活用である。「て」は接続助詞で、その文節の次に補助動詞が続く。よって、「築く」が「イ音便」の「築い」となっている。音便は動詞・連用形につながる。</p> <p>(2) ①は動詞「のつとる」が活用したものである。「のつとる」の意味は、「法などの基準に従う」という意味である。読点に続くので連用形となって、「のつとり」となっている。</p> <p>(3) 「て」は接続助詞で、原因・理由を表す働き、起点をあらわして、その文節を連用修飾語とする働き、その文節を並立の関係にする働き、動詞や助動詞に続き、あとに補助用言を続ける働きなどがある。</p> <p>(4) 「その」は連体詞で体言を修飾する。「それ」「だれ」は代名詞、「いくつ」は数詞で、名詞である。「小さな」が連体詞である。「小さな」は形容詞「小さい」と異なり、活用がない。</p>

演習問題Aの板書例

1
まず、「スピーチ原稿」から読み、それぞれの段落にどういうことが書いてあるかを把握する。意味段落は全部で五段落あり、「発表メモ」は意味段落ごとにまとめられていることがわかる。それを踏まえて(1)解くことができる。(2)は、アが書かれている段落とその前の段落から答えを導くことができる。

- スピーチ原稿
- 形式段落1…演劇部のよさ
- 形式段落2…演劇部のイメージ
- 形式段落3…演劇部の活動内容
- 形式段落4・5…演劇部での自分自身の体験
- 形式段落6…演劇部の魅力

2
「話し合いの様子」を読みながら「資料」を確認していく。最初の山本さんの発言の、「項目をA順に上から並べたもの」のあとの佐藤さんの発言に注目すると、「何度もある」と「少しある」の合計、「自然体験をしている人」とらえていることがわかる。次に、山本さんが「半数を超える」や「三割を切っている」と発言をしている。数値が出てくると難しいイメージを持ちがちだが、50%以上のものと、33%以下のものを探せばいいことになる。「資料」にマーカーを引いたりするとわかりやすくなる。

表の目的は、山本さんが最初に発言をしている。「クラブでどのような行事があるといいかを考えよう」と話し合いの目的を発言していることに注目する。

演習問題Bの板書例

1
まず、全体を読んで最も伝えたいことが何かを理解させる。合唱コンクールで優勝をしたことと、そのためにどのような努力をしてきたかが書かれていることがわかる。見出しは最も言いたいことをわかりやすく、読者を惹きつけるためのものだから、最初の三行部分をまとめればよい。

「学校新聞の下書き」は、*印の部分に特に注目をさせる。

コラムはAからCまで内容ごとに分かれているので、それぞれの主題となる小見出しがつくことがわかる。

「追加した記事の内容」では、「*どのようなアドバイスだったか」と聞かれているので、「インタビューの記録」にある「――どのようなアドバイスがありましたか」以下をまとめさせればよい。

2
「アナウンス原稿」を読みながら「地図」について読み取る。

二段落目の最初では、南側校門からの出入りが禁止になることが書かれ、A以下でその理由が書かれているので、南側校門、自転車置き場、北側校門の場所を「地図」で確認する。直後に「生徒との接触の報告」とあることにも着目する。

三段落目では、「使用が禁止される道路」について書かれているので、学校ではなく「地図」全体に目を向ける。「地図」中の「自転車使用禁止区間」の周辺の特徴を読み取る。色々な施設が多いということは、自転車をを使用することでどのような事が起こり得るかを想像する。

演習問題Aの板書例

1 設問のポイントは、はじめに自分の立場を明らかにすること、次に自分の意見を述べることである。この二点ともがおさえられている選択肢を選ぶ。

2 表やグラフが資料としてある場合は、その資料やグラフの表している内容を表題などから理解することが最初で大切なことである。次に、この設問では(注意)の内容を十分に理解することである。設定された条件を理解することが重要である。そして、特に、注意が必要なものは、原稿用紙の使い方に従うのか、従わないのかである。それによって、指定された字数で書くときに、段落やカギカッコ、句読点の処理のし方が異なることとなる。本問では、原稿用紙の使い方に従って書くことが条件となっている。

3 2と同様に条件の理解が大切である。筆者の意見に対する自分の意見を記述するので、はじめに筆者の意見を整理して理解する必要がある。課題となる問題文の内容を正確にとらえることが求められる。本問では筆者の意見に対する自分の意見を記述するのだから、筆者の意見はどのようなものであるか、を簡潔にまとめたものを記述する必要がある。その上で、その内容に対して自分はどのように考えるかを記述する。自分の意見のみを記述したのでは、本問の条件に従ったことにはならないので、注意する。

演習問題Bの板書例

1 条件は筆者の考えに対する自分の考えを記述するのだから、筆者の考えを正確に捉えることが重要である。本問の課題となる文章は、論説文である。論説文の読解力も問われることとなる。

さらに、その内容から筆者の主張を簡潔にまとめることも要求されている。論説文の要旨をとらえる方法は、論説文の文章構成を理解することである。本問では最後の形式段落に筆者の考え・主張が述べられている。現代建築は改めて先人たちの家を建築する技術や工夫を見直すことで、日本人の生活や健康に適した住宅をつくる必要がある、というのが課題文に述べられた筆者の考えである。

それをおさえた上で、自分はどうのように考えるかを記述する。記述する上で重要なことは、自分の考えを最初の段階で明確に記述することである。そして、次にそうした考えを持つにいたった理由を説明する、といった論理の展開をする。本問の記述の条件が第一段落で自分の意見を、第二段落でその理由を記述するように求めているからである。

2 グラフから読み取れることは何かを明確につかむことが大切である。そのためには、グラフには何が表されているのかを正確に理解することが求められる。本問では、設問文とグラフの下にある四角の枠で囲まれた部分の内容さらに、その下の引用やグラフ作成の基となる資料名を理解する。

次に、グラフの内容を捉える。本問では「あると思う」と回答した人が顕著に多い割合を示していることを捉える必要がある。ここで注意することは、できるだけ具体的な数値をあげて、その資料の特徴を明らかにすることである。そのとき、本問では平成13年度と平成20年度を比較したグラフになっているので、それぞれの年度の数値にも触れておくことが大切である。

また、数値を引用するときは、グラフに書かれている数値をそのまま引用するのはもつともよい。引用にあたり自分で四捨五入や、切り捨て、切り上げ、パーセンテージを割合に変えるなどの単位の変更などに資料の加工は原則的には行わない。

第二段落で自分の考えを書く場合は、明確に立場を記述することである。あいまいな表現や、まわりくどい表現は避けて、読み手に内容が正確に伝わるように記述する必要がある。

演習問題Aの板書例

1

設問の資料の「拝復」とは、返信の場合に使う頭語である。本問では、何を書くのかということ、石倉・森田・大島・坂口・水島の会話の内容から判断する。手紙文を書く上で重要なことは、手紙文の決まりを守るということ、次に伝えたいことを明確に、もらさず書くということである。頭語は「拝復」に対する返信なので、新しい条件下での伝達の開始ととらえて、「拝啓」でよい。次には、「拝啓」を使った正式な手紙なので、時候の挨拶を必ず書くということである。季節のことから盛り込んだ挨拶の文や文言を簡潔に入れる。次に、相手の様子を尋ねることを入れる。「いかがお過ごしでしょうか」以外にも「ますますご清祥のこととお喜び申し上げます」などでもよい。手紙の書き出しの決まりなので、一文で簡潔に書けばよい。いくつかの定型文を覚えておけば足りる。こうした手続きをふんでから、本文を記述する。本文の記述は、時候の挨拶などは異なることからなので、話題転換の「さて」や「ところで」などの語を使用して書き始める。内容について、本問では、相手のセンターに行く日時や人数を落とさないで書く。また、敬語をつけて書く。一般的に文末は敬体で書く。手紙文の最後には結語を書く。「拝啓」に対する結語は「敬具」である。行を変えて、下方に書く。送り先の人や部署を書く。それを後付けという。後付けは、上の方に書き、個人名には「様」を使う。今日では「殿」は社会的地位や立場の下の方に使用する語なので、一般的には使わない。企業や部署のみの場合は、「御中」を使う。

2

ポスターという媒体の役割や性質の一般的な基準に照らして、このポスターについて良い点や悪い点を明確に抽出する。第二段落では自分の考えを書くのだから、このポスターの悪い点をあげた場合には、その改善点や代案を明らかにする必要がある。良い点をあげた場合は、良いと判断した理由やさらに良くするにはどのようにするのが良いのかなどを書くことよい。

演習問題Bの板書例

1

スピーチの聞き方について書くということから、スピーチをする側の立場から考えてみる。ただし、自分の心がけていることを書くのだから、一般論を書いてはいけない。自分がどのようにしているのか、ということを書く必要がある。書く内容として、できるだけ抽象的な表現を避けて、わかりやすいことばで、自分の実践している具体的なことを書くようにする。第二段落では、その理由を書くので、ここでもできるだけ具体的なことがらを書くことが大切である。

2

何を書くのかを正確に把握する。次に、設定された条件に従うことが重要である。本問では、提案を書くので、自分の提案する考えを明確にする。感想や資料の図の案内表示板についての評価だけを書いてはいけない。さらに、本問での注意点は、〈注意〉で指示された条件のなかで、原稿用紙の使い方に従って書く点と、通常の作文では常体で書いているので敬体で書く点にとりわけて留意する必要がある。

3

本問では、提供されている資料がなく、条件も簡潔である。いままで学習したことをふまえて書く。はじめに、自分の考えを明確に書くことが大切である。また、自分の実際に経験したことや、見聞したことを書くことと読み手に説得力のある文章を書くことができる。書き出す前に、文章の全体の構成と、展開について字数を含めて考えておくことが大切である。書き終えたあとには、漢字の誤記や、表現の誤り、文の意味が通じるかなどを確認する必要がある。さらに、全体として、読み手に内容が明確に伝わっている点についても確認しておくことが重要である。

板書例

1

(1) ⑥ 「なったのである」は「なる」＋「た」＋「の」＋「で」＋「ある」である。「なる」はラ行五段活用の動詞である。「た」は助動詞で過去を表す。よって「なる」は連用形で促音便となった。「の」は格助詞で体言に準じるものを示す。「で」は接続助詞でその文節のあとに補助の動詞をつなげる。「ある」は「存在する」という本来の動詞の意味からはなれた動詞の「ある」で補助動詞と分類される。

(2) 「振り返った」のは「だれ」か、を明らかにする。この文では、「少女」である。主語とは一文節を指す。設問文でも文節で答えることが要求されているので、「少女は」が正答である。

(4) はじめに、文の構成の基本単位である文節に分ける。その文節の文の中の役割を明らかにする。

(6) 補助の関係には、補助用言を見つける。補助用言の前には「で・て」がある。この文では「おく」が動詞で「置く」の意味から離れて補助的な意味をそえる補助動詞である。よって、その前の「見て」と「おく」は補助と被補助の関係になっている。

2

② 擬音語で副詞である。

⑤ 「散る」はラ行五段活用の動詞である。「て」は接続助詞で下に補助用言をつなげる。よって、「散る」は促音便になっている。

⑧ 「意外な」は「未然形・だろ／連用形・だっ・で・に／終止形・だ／連体形・な／仮定形・なら／命令形・×」と活用する形容動詞である。

3

(2) 「先生が」が主語、つまり行動の主体である相手が主語なので「見る」を尊敬語にする。「見る」の尊敬語は「ごらんになる」せある。

(3) 「お伺いする」のは「母」である。相手ではないので、謙譲語を使う必要がある。「おっしゃ・ております」の主語は「母」なので、「おっしゃ」を謙譲語に変えて、「申し」または「申し上げて」にする。

板書例

4

(3) 「ない」には助動詞と形容詞がある。助動詞は動詞に接続する。打ち消しを表す助動詞「ぬ」に置き換えて文の意味が正しいものである。「ア」の「忘れる」は下一段活用の動詞である。「イ」の「は」は副助詞である。「ウ」の「ぎこちない」の形容詞の意志部である。「ぎこちない」である。「エ」の「眠く」は「眠い」の形容詞の連用形である。

(5) 接続している語の品詞に注目する。「ア」は「なる」の動詞に接続している。用言に接続するのは接続助詞である。「イ・ウ・エ」は名詞に接続している。体言に接続するのは、格助詞である。

(8) 「ある」には連体詞と動詞の「存在する」と補助動詞で本来の意味とはなれて意味をそえるものがある。

5

ことわざの知識も問われる問題となっている。ことわざの内容をはじめに説明する。次に、自分の考えや意見を書く。この場合も、自分の経験や見聞を書くことができれば効果的である。本問では原稿用紙の使い方に従って書くことが条件にある。また、字数についても条件に従って書くことが求められる。

6

グラフを正確に読み取ることが大切である。グラフのテーマは何か、数値の意味は何か、年度ごとに数値がグラフとなっている場合、年度による比較の意味などを捉える必要がある。第一段落ではグラフの解析を書く。条件により本問ではここで自分の考えを書いてはいけない。第二段落では、自分の考えを書く。そのときに、考えや主張を明確にするということである。曖昧な表現をさけて、明確に伝える文を書く。

7

会話文を手がかりにする点に留意する。会話の内容と資料のポスターを見くらべて、会話の内容を確認する。そして、自分の改善案を明確にする。改善案は具体的なものにする。ここで注意するのは、デザインを文章で説明するので、伝えたいことを整理して書くことが重要になる。読み手に伝えたいことが正確に伝わるように注意を払って書く。第二段落では理由を書くにあたり、自分の経験や見聞を書くことができれば効果的である。

8

自分が話し合いで発言する状況を想定して書くことを考える。ポイントは「話し合い」ということである。聴衆に一方的にスピーチをするのではない。あるいは、個人的な内容を友人と話すのではない。互いの意見を尊重しながら、自らに意見を提示し、参加者の同意を求めたり、ほかの参加者の意見に賛同したり、問題点を探るコミュニケーションをするという状況を理解することが大切である。

【指導のポイント】

説明文では、最初に、テーマを理解することである。説明することがらを捉えることから始まる。次に、形式段落ごとの要約を捉える。さらに、形式段落の要約から意味の上でのまとまりの意味段落を把握する。その上で文章全体の構成を明らかにする。そこで、事実の説明とその事実に対する筆者の意見や考えを区分することが重要である。

板書例

1

あなた⇨両親⇨父親の精子と母親の卵⇨合体
⇨受精卵⇨一つの細胞⇨新しいDNA(ゲノム)
たった一つの存在⇨生き物⇨みんな違う

●両親⇨祖先⇨日本人の始まり⇨地球上で暮らす人
⇨祖先⇨同じ⇨アフリカ

↓その前⇨わかかっていない
●地球上の生きもの⇨祖先⇨同じ
⇨バクテリア・ハエ・植物・ヒト

⇨「見かけ・暮らし方⇨異なる」⇨「DNA(ゲノム)⇨良く似た構造・働き」
⇨「三十八億年前から続く⇨生きものの歴史」⇨あなたの存在
⇨たくさんの生きもののおかげ⇨長い時間⇨共有する仲間

2

●電話⇨手紙⇨同じ内容⇨ことば⇨異なる
敬語がふえる
⇨条件

■目の前にいない⇨表情や態度⇨敬意を示せない
■日本の伝統⇨書きことば⇨権威
■物理的な距離⇨心理的に距離⇨敬語

(例)学生のレポート

書いている人⇨顔が浮かぶ⇨その人と向き合うような気持ち

⇨世話になった人への謝辞⇨デス・マスタ

⇨尊敬語⇨多用

失礼を避ける⇨無難な尊敬語

謙譲語⇨出にくい

相手との相対的關係⇨「お(ご)になる」⇨万能形式⇨尊敬語

⇨丁寧語との区別もむずかしい

重要語句

2 ○謝辞⇨感謝のことばのこと。

板書例

3

■平安朝時代⇨貴族⇨「豊かな時間⇨感性を磨く」
一般的⇨感性豊か⇨生きる彩り⇨豊か
感受性⇨磨く⇨きりがない

■万葉集時代⇨無為な繊細さ⇨無縁⇨単純・率直
⇨平安朝の貴族⇨時間⇨無限に細かくする
⇨退屈を消す⇨人生⇨豊か
⇨人々⇨一瞬一瞬してきたこと⇨紫式部の文学⇨生みだす

4

■子どもの頃の最初の記憶
⇨三歳⇨五歳⇨不正確
⇨前後関係⇨わからない

例 山の景色・一本の木に実・沢ガニ⇨前後関係もない⇨唐突にその場面

⇨少し大きくなってからの場面

例 「幼年期⇨少年期」転換

犬⇨吠える⇨なぜ吠えているのか?⇨考えるようになる

⇨自分の存在⇨関係を感じる

家族との関係・近所の人々との関係・教師との関係・生徒たちとの関係など

⇨さまざまな関係⇨自己を創造

⇨関係の中⇨自分の役割⇨安心感

重要語句

3 ○感受性⇨外部からの刺激をうけとる能力。

4 ○唐突⇨前ぶれもなく急にものごとが始まる様子。

【指導のポイント】

論説文では、筆者によってテーマが提起され、そのテーマに対して、筆者の主張が行なわれる。テーマは文章の最初に提示されることが多い。次に、筆者の主張の根拠となる理由が展開される。そして、最後に筆者の主張が述べられる。こうした構成以外に、テーマとともに筆者が主張を最初に述べる場合と最初に加えて最後にも述べる場合がある。

板書例

1

■話題の提示

●女性・老人・子ども || 社会から保護・管理される対象

●強い主体 || 自己決定・自己管理・自己責任 ↓ 自立・自由

|| 前提 || 近代法制度・近代経済社会学

■問題提起

自己決定・自己管理・自己責任

↓ 必ず前提となるのか? ↓ 自由・自立

自由 || ● 「リベラティ」 || 因習的な束縛からの自由

● 「リベラティ」

|| 「強い自己実現への意識」 || 不自由」からの自由 || 気前よさ

●個人 || 「自己実現を求める過程 ↓ 傷つく」 ↓ 「自立 ↓ 孤立」

|| 「支え合い」 || 「家族・地域」 || 中間社会」の失った社会

■筆者の考え

●支え ↓ 反転 || 双方向 ↓ 支えられる

●個人 || 「嘲り・裏切りなど」 ↓ 弱い存在

|| 不完全な存在・不明なもの ↓ 家族・地域 || 中間社会

●現在のケア制度 ↓ 「ケア専門職」 || 強い主体

↓ ケアを必要とする人たち || 弱い主体 || 思い込まされている

●傷・障害 || 普通 ↓ 弱さ

|| 財と権利と尊厳の分配 ↓ 修正 || 健常者の生きやすい社会

2

■話題提示

徒然草の歌 ↓ さかりの花・輝く月 ↓ そのときだけながめるものではない || 日本人の美意識の真髄

■問題提示

なぜ?

●筆者の考え

●完全な美 || 鑑賞者 || 想像力を働かせる余地がない

●対象の不完全さ || 鑑賞者 || 想像力で補う

●鑑賞者の美への志向 || 美 ↓ 存在 || ×・生成 || ○

↓ 美となる可能性を秘める

|| 美 ↓ 生々流転 || 変わっていく姿 || 日本人の美意識

重要語句

2 ○美意識 || 美しいことを感じる意識。

板書例

3

■話題提示

ことば || 人間の活動 ↓ すべてにかかわり

ことばによる定義 || 人間

|| 理性的動物・政治的動物・笑う動物・二本足で立つ動物

■筆者の考え

●ものを語る動物 || これまでの定義を含む ↓ 理性的動物・政治的動物

●笑う動物 || 人間 ↓ ことばの使用

●二本足で立つ動物 || 口 ↓ ものを捕らえる働き || 解放 ↓ 脳の発達 ↓ ことば

4

●文化におけるコミュニケーション || エドモンド・リーチ ↓ 三つのレベル

一、「自然」のレベル || 「信号」レベル

↓ 絶対的 || 人間の条件

|| 人間の共通属性

●例 スリランカと日本 || 自然環境が異なる ↓ 自然観が異なる || 価値観が異なる

|| 条件反射的レベルで理解可能 ↓ 異文化理解の最初の段階

二、「社会」レベル || 「記号レベル」

|| 異文化の理解 || 社会的な習慣の理解が必要

●例 アメリカと日本の交通ルール・服装など || 異なる ↓ 常識のレベルで消化可能

三、「象徴」レベル

|| 外部の者 ↓ 理解が困難

●例 (理由) 社会特有の価値・行動様式・習慣・信仰

国旗のデザイン || 国の歴史・文化と結びつき

文化コミュニケーション

|| 文化の理解が必要 ↓ 「信号」「記号」「象徴」 || 三レベル

|| 総体として異文化形成 ↓ 人の言語・行動の意味づけ

重要語句

4 ○属性 || 特定のものが共通して持っている性質や特徴のこと。
○異文化 || 異なった文化のこと。

【指導のポイント】

小説文では、場面の転換に注目して、中心的な登場人物の気持ちの変化を読み取る。そうした、中心的な登場人物の気持ちの変化の中に、作者の読み手に伝えたいことが描かれている場合が多い。中心的な人物の気持ちは、感情の直接的な表現に加えて、会話の内容や行動、情景の描写から読み取ることができる。

板書例

1

※「ぼく」の気持ち

今日子 → 寝顔 → 安らか

「ぼく」の気持ち → 今日子が **心配**

アスカ → 今日子にくつついている

「ぼく」の気持ち → アスカの乳児のころ → 思い出す → **幸福感**

ミライ → 自分の作品の修復

「ぼく」の気持ち → 家族四人がひとつの部屋で時間を過ごす

↓ **家族** であることのよさを実感

午後 → 暑い

「ぼく」の気持ち → 溶けてしまいそう → 家族 → 個人の境界を曖昧にする

→ 四人でしか作り出せないもの → **家族の結びつき実感**

↓ ミライ・アスカの小さい頃 → 頻繁 → 家族のふれあい・一体感

ミライ → 修復 → ミライハウス → 母の病気 → 直ってほしい → 真剣

「ぼく」の気持ち → ミライ → 母に直ってほしい → 強い思い

→ **切ない**

2

※「克久の気持ち」

克久 → 書店でコミックの立ち読み

↓ 相田に気づく → おずおずした相田の視線

克久の気持ち → 「相田 → クラスの地位争い → 敗者」とわかる

孤独な相田の顔

克久の気持ち → その場を立ち去れない

相田とあいさつ → 相田 → 胸を反らす

克久の気持ち → 相田に威圧感 → 感じない

相田 → 克久を応援すること → 照れくさい

克久の気持ち → 相田の気持ちをうけとる

→ すがすがしい → 幸せな気持ち

重要語句

2 ○威圧感 → 威勢や権力などで精神的におそれを感じることを。

板書例

3

※「洪作の気持ち」

犬飼 → 洪作の行きたい高校 → 浜松 → 県下で一番難しい

↓ このままでは入れない → 洪作に伝える

↓ どうする? → 洪作を見つめる

洪作の気持ち → 犬飼 → 冷たい・邪慳

↓ どうしても入りたい → 犬飼に伝える

犬飼 → 睡眠時間 → 縮める

↓ 勉強時間二倍 → 眠っていない時間 → すべて勉強 → 指示

洪作の気持ち → 勉強 → 烈しいやる気

犬飼 → 洪作の勉強への強い意欲を受けとめる → 指導をしよう

↓ 風呂 → 歌を唄う

洪作の気持ち → 千本浜の蘭子の唄った歌 → 気づく

↓ 自分が魅力に思った歌 → 心が締めつけられる

犬飼のもとを退出する → 下田街道 →

洪作の気持ち → 昂奮 → やる気が強くわく

重要語句

3 ○邪慳 → 他の人に対して、思いやりのない様子。

【指導のポイント】

随筆は、筆者の考えや意見が自由な形で書かれている。筆者の個性的な表現が使われたり、文章の構成が独特であったりする。文学的な随筆にあっては、場面の展開に注目して筆者の気持ちの変化を読み取る。また、論理的な随筆にあっては、筆者の論理展開を文章の構成から捉えて、筆者の主張を読み取る。

板書例

1

■話題提示

幼年と少年の境目はどのあたりにあるのか

■筆者の考え

幼年⇨ひたすら自らの気持ちに沿って生きようとする
少年⇨外部への関心や気兼ねを覚えるようになる

■筆者の考え

幼年と少年では孤独の質が違いそうに思われる

← 幼い頃の孤独⇨孤絶の恐怖に溢れている

← 少年時代の孤独⇨遠い先で夢や憧れに繋がっている

■筆者の体験

ある状態に快さと満足を覚え、大抵自分が独りでいる時だった

2

●物を捨てる⇨生活の中⇨最大のエネルギー

⇨ゴミの分別収集⇨複雑なゴミの分別

⇨世話好きな正義感強いおばさん

⇨分別や曜日の守られていないゴミ⇨説教

⇨筆者⇨おばさんの行為⇨複雑な思い

●筆者が子供の頃は無駄なゴミを出さない生活態度

⇨当たり前⇨今は社会の仕組み⇨おかしい

●アウシュビッツ⇨手作りのお人形⇨捨てればゴミ

⇨温かい・愛らしい品

筆者⇨「思い出」⇨隠れた喜び⇨リサイクル

重要語句

1 ○眺望⇨見渡したながめ。みはらし。

2 ○リサイクル⇨再循環のこと。製品などに使用された資源を、再び資源として利用すること。

板書例

3

■話題提示

日本人⇨生活⇨木で成り立つ

⇨木の温かみ・柔らかさ⇨意識しないほど身近なもの

■筆者の体験

●三歳から四歳⇨木の認識⇨食器棚の木の香り⇨嗅覚⇨仏像彫刻が樟を素材にしたことがわかる

●歳とともに深まる⇨木の感触

⇨箸へのこだわり⇨木の文化

⇨現代の若者⇨木とふれ合うチャンスがない

■筆者の考え

神社の神木⇨神の依代⇨木が中心になっている

西洋人⇨自然は克服する対象⇨材料より加工

日本⇨素材を大切に保存する⇨自然のままの木

重要語句

3 ○樟脳⇨クスノキから抽出した結晶で、防虫剤などに使用される。

板書例

1

- (1) 意味の上から、句点の入る位置で判断する。
- (2) 「見ゆ」が終止形なので本来の文の成分の構成は、この箇所が終わることになる。「静けさ」は名詞なので体言である。
- (3) A～Gの歌に含まれる擬態語は、Aの「あかあか(＝明るいきさま・非常に赤いきま)」、Cの「しとしと(＝濡れているさま)」、Dの「わん(と)」、Eの「ゆらり(＝物がゆつくりと大きく揺れ動くさま)」「わん(と)」は一般には使われていないので、辞書に載っていない。
- (7) 「向日葵」の咲く季節から推量できる。
- (8) 「金の油のような日光」で「ような」が使われていない。「ような」を使わない比喩表現は隠喩である。
- (10) 実際に目の前に存在していない風景が目に見えるようだ、といっていることから推量できる。
- (11) ウ 聴覚とは音をとらえる感覚である。音にかかわる感動を詠んだ歌を選ぶ。

2

- (1) Dの歌では、「思っていた」と詠んだ部分から、「自分が思っていた」ので、自分と子どもは同じになる。
- (2) ①の直前の「いつくしむ」とは「かわいがって、大切にすること」であることから、推量できる。
- (3) 「けむ」とは過去に起こったことの原因や理由の推量に使われる。「うだろうか」という意味になる。
- (5) 終止形で終わる箇所に注目する。
- (6) 音数を数えることで判断できる。字余りは感動を強調する表現技法のひとつである。

3

- (2) 三首とも句末が同じ語の体言であることに着目する。さらに、その三首とも三句のおわりに「けり」が使われていることに注目する。

4

- (2) 清水や柳の影から、さわやかな涼しさを感じ取る。
- (3) 「いさ」に注目する。「人というものは、どうゆうものかはつきりとはわからないが…」という内容から判断できる。

板書例

5

- (2) 「わらび」は早春に芽を出す植物であることから、判断できる。

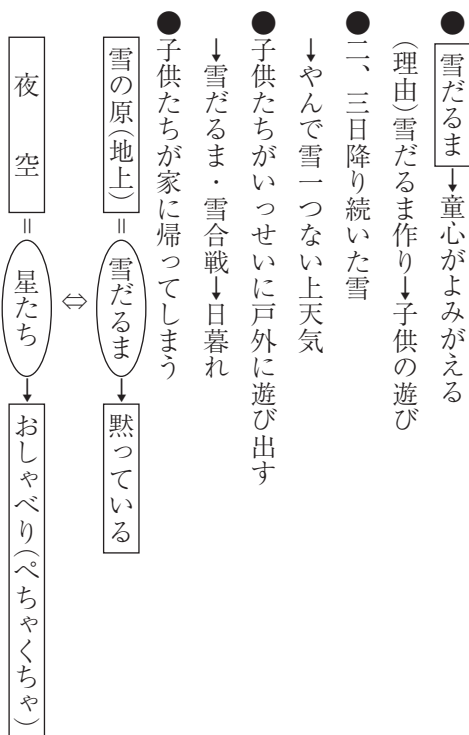
6

- (4) A: 「赤とんぼ」(秋)、C: 「風鈴」(夏)、D: 「桜草」(春)、E: 「咳」(冬)、F: 「枯野」(冬)、G: 「すすき」(秋)

7

- (1) Bの季語は梅である。梅は春の季語である。梅は春のとりわけ早春に使われることから判断できる。
Eの季語は名月である。池に映る月を鑑賞して、その美しさに魅了されて、一晚中池の周りをまわった、という内容である。「夜もすがら」は一晚中の意味で、美しい月に出会えた喜びと感興の深さがうかがえる。
- (2) いずれも川のことを詠んだものである。しかも、大河という表現や、あつめてという表現から水量の多い川を想像できる。水量を多くさせるのは雨であるから、その点から解答を選択する。

8



重要語句

- 8 ○上天気 ⇔ よく晴れた天気のこと。

板書例

1
 蟬頃↓東京に放浪した頃の作品
 裏町↓せまい部屋↓夏蟬の声⇨幼年時代への回想
 蟬の声の表現⇨生活のさびしさ

- 2**
- (1) 2行目・5行目・9行目に注目する。
 - (2) 9行目・10行目・13行目から、作者が旅で汽車に乗っていることが分かる。
 - (3) 1行目では詩の対象となる場所の特定がおこなわれている。それに続く部分を、情景描写の部分と作者の心情を表現した部分に区分する。
 - (4) 6行目の主語は2行目に描かれている。12行目には、その主語にあたる語を言い換えて表現している。
 - (7) 作者の心情が描かれている箇所は11行目から13行目である。
- 3**
- (1) 繰り返しとは「反復」のことである。
 - (2) 1行目には対象の特定が行なわれている。2行目から11行目について駝鳥の様子などが描かれている。その描かれ方の違いに着目する。2行目から5行目には、駝鳥の様子を描いている。6行目から11行目には、駝鳥のこころを、作者が推量して描いている。そして、12行目と13行目で作者は読者に訴えたいことを歌っている。
 - (4) 5行目から、駝鳥が誕生し生息している地域とは遠く離れた場所であることがわかる。生まれた土地は当然に生息に適した土地である。その土地に駝鳥はもどりたいと思っている、と作者は想像している。
 - (5) 主語を確実に読み取る。主語が7行目に記述されている。
 - (6) 前の部分の全体から読み取れることを選択する。
 - (7) 設問文に注意する。書き抜くことが求められている。
 - (8) 12行目・13行目の作者の心情を描いた箇所の表現から、**工**が適当である。

板書例

4

- (2) 海が天まであがるとは、海と空の境目が作者の今いる山頂の位置より上に見えるという意味である。
- (3) 「ような」に注意する。比喩表現では、「ような」などの語で例えるものを表している場合は直喩であり、そうでないものを隠喩と分類する。
- (4) だれおちるといふ表現を使って緑の木々の葉とはどのような状況を説明したものか推量する。だれおちるとは、対象となるものが多い崩れ落ちる様子を表す。崩れ落ちるとは、ものが多く落ちてくる様子を表す。
- (5) 作者の強い心の動きを描いている部分を見つめる。9行目に着目する。
- (8) 読者に共感を求めているとは、自分の感動を読者に求めることである。読者に問いかけを発している部分に注目する。

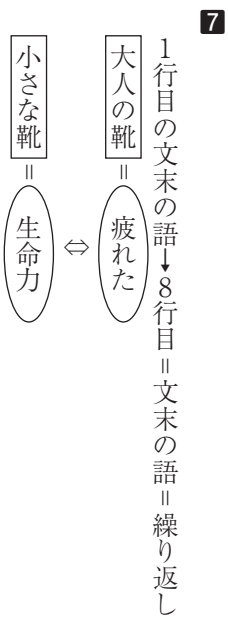
5

● 僕⇨僕自身⇨「欺される⇨欺すことさえ出来ない」⇨自分自身の心を扱いかねている
 「自分に都合が悪い⇨自分を欺く」

● 「物事の道理に従いたいという思い⇨自分を欺けない」
 ● 自己批評⇨人間の本質を観察し見通す⇨おかしみを感じさせる表現

6

- (1)(3) 3つの部分に分けられる。区分は、初めに部分は、詩の描く対象を特定する部分である。これが、1行目から4行目である。次に、5行目から12行目にかけては、その対象を作者の見方で説明する部分である。最後に作者の感動が描かれている。
- (2) いたいけとは、幼くてかわいらし様子をあらわす語である。無防備とは、自分から外部からの攻撃から守る手段を持っていないという意味である。これらの意味から推量できる。



【指導のポイント】

古文では原文で省略されている主語を補って読むことで内容を捉えることができる。また、古語の意味が現代語の意味と異なるものが多いので、課題として取り上げられる作品で多用される語については、意味を覚えておく必要がある。漢文については絶句・律詩の構成を理解することと、返り点について習得することが求められる。

板書例

1

- 侍女↓報告↓竹取の翁
|| 「かぐや姫↓月に心を寄せている↓ただごとではない様子」
- 竹取の翁↓かぐや姫に質問
|| 月を見る↓物思いにふける様子↓なぜ?
- かぐや姫|| 嘆いてはいない
↓世の中|| 寂しい・しみじみした気持ち

■かぐや姫↓物思いに沈む様子

●竹取の翁↓かぐや姫|| 大事な子

|| 心配↓原因を知り、なんとしてあげたい

●かぐや姫|| 月を見ないではいられない↓嘆く

2

●黄鶴楼 || 昔の仙人が黄鶴に乗って飛び去った↓二度と戻らない
白雲↓千年ゆっくり流れている

●鸚鵡州 || 対岸の街の樹木+草で青々しい中州

●自分の故郷 || どの方向か? ↓故郷を思う気持ち
↓故郷 || 離れて寂しい

3

●鷹の羽の中の虫
|| 不自由のない身 || 翼も動かさない
↓「千里の遠く↓移動」

↓「ほかの鳥↓逃げる」

↓羽に住みつき↓肉を刺す↓血を吸う

●虫の仲間 || 多くなる↓鷹 || 死

●虫↓死骸から出る

↓飛べない+走れない+いのちをつなぐ手段もない

●すずめの子 || くちばし↓つばもうとする

●虫 || 逃げかくれた

重要語句

3 ○つばもう || 鳥が物を食べるために、その物をつつくこと。

板書例

4

- 王戎 ↓七歳 ↓子どもたちと遊ぶ
(道ばた ↓すももの実がたくさん ↓子どもたちが実を取る)
- 王戎 || 動かない
(理由) || 予測 || 「道ばたにあるのに多くの実を人が取らない ↓苦い」
すももの実 || 実際に苦かった

5

堀河院 || 帝の時代

●勘解由次官明宗 || 名高い笛吹き ↓ 気後れする人

■院 || 笛の音をきく ↓ 明宗 || 緊張してうまく吹けない

|| 明宗が緊張しないよう配慮 ↓ 明宗に坪庭で吹かせる ↓ 立ち聞きする

●明宗 || 女房が聞いていると思う ↓ 思うままに吹く

■院 || すばらしいと感動する

●明宗 || 院が聞いていると知る

↓緊張 ↓ 縁側から落ちる ↓ あだ名 || 案楽塩

6

稻荷 ↓ 参拝 ↓ 御社への険しい道 || 上るのがつらい

●すいすい登って参拝する人 ↓ うらやましい

●午前十時頃 ↓ 暑くなってくる

↓ 苦労していない人はどうして参拝しに来ているのだろう

●普段着の三十歳位の女と話す

↓ 七度詣でのうち三回目 || あと四回は造作もない

●ささいなできごと ↓ 「らくに登れるあの人」の身になりたい

25

古典の解説文・融合文の演習

◆指導ページ P.158～167◆

【指導のポイント】

古典の解説文や融合文では、古典の解釈を中心とする文章に原典の古文がはさみこまれている。よって、原典の作品の内容を説明している部分なのか、それとも筆者の視点からの解釈や評価を記述した部分なのかを区分して捉えることが大切である。古文を理解する知識と、説明文を読み取る読解力が求められる。

板書例

1 牧之「そり歌」↓雪国情景↓美しい
山からそりを曳き下ろす↓山のおもとに到着
そりを曳く男たち↓気持ちが悪くなって歌↓自慢の声
女たち↓遠くから歌が聞こえる↓男たちの迎え
↓男たちと出会う↓いっしょに歌いながら帰る
↓幸福の時間
●雪のめぐみ↓心のめぐみ

2 ●馬耳東風↓値打ちのある言葉↓馬は知らん顔をする
●李白の詩↓李白が気焰を上げて詠う
世間の人は李白の歌を聞かない↓相手にしない
←「世間の人↓馬」
●わが国↓馬の耳に念仏

3 ●平安文学にあらわれた黒
↓源氏物語 薄雲の巻↓藤壺の後の死↓光源氏のかなしみ
●藤壺↓葬送↓世間のかなしみ↓黒づくめ
源氏の住まい↓二条院↓庭の桜
↓「今年ばかりは墨染に咲け」↓一日中念誦堂にこもる
《歌》 夕日+山の木々+雲↓鈍色↓薄雲↓自分の喪服の色

「薄雲」↓心情・風景↓鈍色に統一
藤壺↓哀悼↓寂寥感
調和↓源氏物語の作者↓美意識
他の巻↓はなやかさ

重要語句
○寂寥↓寂しい様子のこと。

板書例

4 「密雨散糸賦」
↓糸↓雨↓故事の引用↓鬢髪にまじる白髪↓春雨
煙雨↓東洋の風土↓深く根ざしたもの
〔例〕
王維↓送別詩
↓柳の色を新しくする↓春の雨
李嶠↓詩↓深い色↓柳↓煙雨↓春の雨

5 建礼門院↓壇ノ浦で入水↓源氏の兵が救う↓大原の寂光院で庵主となる
建礼門院右京大夫↓建礼門院と恋人の資盛↓生きた証
『建礼門院右京大夫集』の後半↓平家滅亡の後
↓自分自身の生涯を書き留める↓女のひとつの個性、自覚↓別な自我
↓「文学的価値↑高い」

『建礼門院右京大夫集』
●歌集
●序文↓人に見せるための歌集ではない↓心に浮かぶことを書き留めておく
●後半↓平家滅亡後↓平家の都落ち↓世の中の騒ぎ↓夢・まぼろし
↓言葉で表現できない思い
↓凄い衝撃
建礼門院右京大夫↓『平家物語』の中心的人物のひとり

重要語句
○鬢髪↓頭髮のこと。
○煙雨↓煙のように降る雨のこと。

板書例

1

- (2) ① ⑥の直前の「て」に着目する。接続助詞「て」のついた文節に続いて、補助動詞がくる。よって、補助の関係になる。
- ② 格助詞「の」の働きは、その付いている文節が主語・述語の関係や連体修飾語になる関係、並立の関係、体言に準じるものをつくる役割がある。その文節に続く文節は、動詞+助動詞+助詞で用言なので、動詞の用言を自立語とする文節である。体言ではなく用言なので連体修飾語として続く関係ではない。当然、修飾語・被修飾語の関係ではない。「の、の」の型になっていないので、並立の関係ではない。「こと」「もの」に置き換えて、正しく意味が通じないので、体言に準じるものをつくる役割でもない。よって、主語を表す格助詞「が」に置き換えることができ、意味の上からも判断して、主語・述語の関係である。
- (8) 「たびたび」は副詞である。直後の読点から、それに続く「人が」を訪れた」の部分の述語の「訪れた」を修飾しているのがわかる。
- (16) 「はいりこ」むの主語は「犬」であり、「踏み荒らされたしまった」の主語は「庭」である。エの文では、選択肢の文では主語となる文節は、「犬が」である。本来ならば「主語」を変える必要がある。

2

- (1) 「やっと」は副詞である。活用のない自立語で一語である。「明るい」は形容詞である。活用のある自立語で一語である。「気分」は名詞である。活用のない自立語で一語である。「に」は変化した結果を表す格助詞である。活用のない付属語で一語である。「なっ」はラ行五段活用の動詞「なる」の促音便なので連用形である。よって「なっ」は一語で動詞である。「て」は後に補助用言を続ける接続助詞で、一語である。「き」はカ行変格活用「くる」の連用形である。ただし、この「くる」は「来る」ではない。直前の接続助詞「て」から補助動詞と判断できる。活用は連用形である。「た」は完了の意味を表す助動詞「た」の終止形である。
- (6) 可能動詞は五段活用の動詞が転化したものである。すべての可能動詞の活用は下二段活用となる。「見る」は上一段活用なので、可能動詞には転化しない。「見る」に可能の意味をつけ加えるには、助動詞「られる」を使う。「られる」は上一段活用の未然形に接続する。
- (10) ア・ウ・エ・オはいずれも「ない」の直前の語が動詞である。よって、これらの「ない」は単独で文節をつくることのできない付属語で助動詞である。

板書例

3

- (3) ① コーヒーを出す動作・行為の主体は、お客様ではない。自分の動作・行為なので、謙譲語を使う。
- ② 買ったという行為の主体は、お客様である。相手の動作・行為なので尊敬語を使う。

4

- (1) ⑦ 「よく」は、形容詞ではなく副詞である。この文では「知る」能力が充分にある様子を示している。
- (3) 「ない」の直前の語が動詞である場合、助動詞ととらえてよい。「ない」には形容詞と、形容詞の一部そして助動詞がある。
- 形容詞の「ない」には、本来の形容詞の「ない」と、他の語について補助的な役割を果たす補助形容詞がある。また、「あぶない」や「はかない」、「さりげない」などのように形容詞の一部に「ない」を含むものがある。助動詞「ない」は付属語なので、その語だけでは文節を構成できない。

5

- (1) ① 本来の意味から離れて、補助的に意味をそえる働きをする形式名詞「もの」「こと」「とき」に言い換えて意味が正しければ、体言に準じるものを表す助詞の「の」である。①の「の」がこれにあたる。
- ④ 続く語が体言ではない。「の」が付いている文節が、続く文節と主語・述語の関係になっていない。格助詞「が」に置き換えて意味が正しくおとる。
- (2) 助動詞「れる」と「られる」はいずれも受け身、自発、可能、尊敬の意味を表す。「れる」は五段活用の動詞などにつく。「られる」は助動詞「せる」「させる」や上一段活用・下二段活用・カ行変格活用の動詞につく。意味をとらえる上で、自発は動作・行為などが自然におこる様子をあらわしていることから判断する。とりわけ判断がむずかしい場合は、受け身・可能・尊敬ではないことから、判断することもできる。

板書例

1

表1

「同じ意味の言葉だと思いか。それとも、使い分けのできる言葉だと思いか。」

I 「同じ意味だと思う」

II 「使い分けができると思う」

① 「使い分けができると思う」が「同じ意味だと思う」を約七パーセント上回っている

②⑤ 「同じ意味だと思う」が「使い分けができると思う」を上回っている

② 「取り消し」と「キャンセル」は約六〇パーセントの違いがある

表2

「同じ意味だと思う」と答えた人を対象に行った、「不特定多数の人に宛てた文書等に用いる言葉として、どちらの言葉を使う方がいいか。」

すべての組み合わせ

- ・ 「漢字を使った方がいい」が「外来語を使った方がいい」を上回っている
- ・ 「漢字を使った方がいい」の項目でも半数以上
- ・ 「合意」と「コンセンサス」は八割を超えている

漢字を用いる言葉と外来語

↓ 同じ文脈で用いられる語は同じ意味であると感じる人が多い

← 漢字を使って書く方がよいは多い

← 漢字を用いた言葉で表現するほうが、他者に伝わりやすい

板書例

3

「話し合いの様子」

● 「地域の交流を深めるためにはどうすればよいか」について、グラフ1・2をもとに考えたこと

● 原田さんの意見

- ・ 若い世代の調査結果が他の世代の調査結果と異なっているは気がなった
- ・ 若い世代が他の世代の人と交流できる機会を増やすとよい

グラフ1 「現在の地域での付き合いの程度」の「よく付き合っている」の割合を年齢別に比較し年齢によって大きな差

グラフ2 「望ましい地域での付き合いの程度」の「住民全ての間で困ったときに互いに助け合う」を比較しそれほど差がない

ある程度の割合の人には困ったときは住民全員で助け合いたい

↓ 若い世代の人も興味を持てるような地域の祭りの開催

● 西村さんの意見

- ・ 他の世代と比較して若い世代の調査結果が特徴的であるは原田さんと同意見

グラフ1 「よく付き合っている」と「ある程度付き合っている」の合計の割合

● 他者の年齢：五割を超えている 二〇～二九歳：五割未満

三〇歳以上になると、結婚して新しい家庭を持つ人たちが増え、行事に参加

↓ 地域の人たちと自然に付き合う機会がある

↓ ふだんから二〇～二九歳の世代の人たちにも行事に参加してもらおう工夫

● 今井さんの意見

グラフ1 「よく付き合っている」の割合

● 七〇歳以上：約三割 他者の年齢層：二割もしくはそれ以下

グラフ2 「住民全ての間で困ったときに互いに助け合う」ことを望ましい

● 二〇～二九歳：三割超え 他者の年齢層：四割超え

個人個人の態度が重要

↓ ふだんからあいさつを交わしたり声をかけあって、よい雰囲気にしていく

板書例

1

意見文
敬語の使い方↓決めつけたくない

(理由) ●個人的な考え↓言葉使い↓異なる

●歴史的な変化

■敬語の使い方↓どのような使い方をしてもよいのか？

(筆者の考え) ↓違う

(理由) 言葉↓「相手」・「場」

(筆者の考え)

相手に応じた話し方↓「人も自分もともに大切にす」コミュニケーション

2

課題の文章

本⇨一人で読む⇨一人一人で違った速さ+深さ

活字の塊⇨能動的な本の読解⇨考える力

読書⇨主体的に操作⇨情報源

3

設問文から、日本の中学生の傾向について書くのであるから、日本の中学生のグラフに注目する。注目する上で、他の国の中学生との比較と項目ごとの比較をもとに、自分の考えを展開することが重要である。自分の考えを書く点については、グラフの数値についての感想ではなく、その数値に対する自分の分析や考えを書く必要がある。自分の体験や見聞を書くこともひとつのポイントである。文体は原則として、常体で書く。また、原稿用紙の使い方に従って書く条件から、形式段落や句読点、会話部分の処理に留意する必要がある。

4

比較した表なので、一方の年度の質問項目の数値をたがいに比較するのではなく、年度による数値の違いに注目して、自分の感想と考えを書くことが重要である。自分の感想・考えは、比較の数値の分析との違いを明確にすることが求められる。原稿用紙の使い方に従って書く条件から、形式段落や句読点、会話部分の処理に留意する必要がある。

板書例

5

手紙の書き方の形式についての知識が求められる。頭語の「拝啓」に対する結語は「敬具」である。時候の挨拶を書く。相手の近況を尋ねる内容の文を書く。次に主文で、内容を明確に伝える。ここでは、「さて」といった話題を変える語を使って主文を書きはじめることが多い。最後に、結びの挨拶を入れて、結語を書く。その後、日付、署名、宛て名を書く。宛て名には「様」をつける。また、敬語の使い方にも留意する必要がある。尊敬語、謙譲語、丁寧語の使い方や二重に敬語をしない点に注意する。さらに、字の大きさや、一行の字数にも配慮することが求められる。

6

会話文を手がかりにして書くので、課題の会話文の内容を整理して読む必要がある。会話文を読むにあたって、設問文にある条件を会話文の内容に当てはめて、内容の区分をしつつ読むことで、書く内容が明らかになる。なお、発表することを前提に書く文なので、聞き手を想定して、言葉使いや一文の長さに注意する。また、条件にあるように、敬体で書くことも留意する。

7

自分の感想と作品の内容の分析・解説なのかを明確に分けて書く必要がある。また、作品の分析・解説にあたって、作品の内容と作者の気持ちを書くこと、さらに、作品の表現についてのことを書くことが必要である。

8

抽象的なことばの示す内容について書く場合、自分の体験や見聞を書くことで、読み手に具体的なイメージを与えることができる。文章の構成は論説文の構成に従って書くのが書きやすい。論理展開のひとつとして、次のような展開もある。最初に、指定されたテーマについて提示するとともに、自分の考えをはじめに提示する。次にそういった考えを持つにいたった理由や自分の考えの説明部分で自分の体験や見聞を書く。最後に、改めて、自分の考えを言い換えて読み手に伝える。論理の展開は他にもあるが、重要なことは、自分の考えや意見を読み手に明確に伝えることである。